

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

推進校実施報告書

- 1 学校名：岐阜県高山市立中山中学校
- 2 実施日時：2018（平成30）年11月15日（木）14：00～16：00
- 3 対象：全校生徒455名、地域の方約30名
- 4 派遣アスリート：大前 光市 さん  
(義足ダンサー リオパラリンピック閉会式での演技)

5 授業内容：講演、実演

2018（平成30）年11月15日（木）に、岐阜県高山市中山中学校にて義足のダンサーである大前光市さんを講師としてお招きし、全校生徒および地域の方々を対象とした講演が行われました。途中には、大前さんによるダンスの披露もあり、オリンピック・パラリンピックリオ大会の閉会式が思い出される実践となりました。

「誰にでも輝ける場所がある」というテーマで行われた講演は、片方の脚がないおもちゃの兵隊にまつわるアンデルセンの童話をモチーフにした映像から始まりました。おもちゃの兵隊に扮した大前さんが現れ、片脚での演技をはじめると、生徒達は息を吞んでその様子を見つめているようでした。

大前さんは幼い頃、何をするにもゆっくりとしていたため、「のろまの亀市」などと呼ばれて周囲にからかわれていたそうです。そのような状況は中学生になっても変わりませんでした。文化祭でのクラスの劇で準主役を務めることになり、本番で成功を収めると、たくさんの人に拍手を贈られ、とても充実した嬉しい気持ちになったといいます。舞台の上でならスーパーマンになれると感じた大前さんは、進学先の高校で演劇部に所属し、プロを目指すようになりました。高山にあるバレエ教室へは、時にはヒッチハイクで通ったそうです。

大前さんは、土木関係の仕事に就いていた父親とは全く逆の、華やかな世界を志望した結果、舞台という方向に興味に向いたのだろうと話していました。しかし、舞台での仕事を目指して進学した大学では、自分の経験が周りと比べて少なく、実力も劣っており、必死に練習や減量に取り組んだといいます。ダンス一本でいこうと決心し、練習を続ける日々の中、あるオーディションの直前に交通事故に遭い、膝下の切断を余儀なくされました。

膝下切断後は、膝下のない状態になかなか慣れることができず、何度も転び、また、ダンスを再開してからも、オーディションに繰り返し落ちたり、仕事を解雇される等、辛い時期を経験したといいます。その頃は、脚の切断前と同じように踊りたい、障害者じゃないと思いがらの毎日だったそうです。葛藤の中にいたある時、「負けんな。お前だったらできるぞ。」という父親の言葉を聞き、父親が自分のことを心配していることを知ったといいます。そして、そこで父親の偉大さに気付き、自分も同じように、自分なりの生き方で、無様でも美しくなくても生きていこうと思うようになったそうです。そして、あるとき、義足を外してダンスをしてみたところ、とても動きやすく、また、仲間からもその方が大前さんらしいと称賛され、以来、義足なしでのダンスにも取り組むようになったといいます。生徒たちは、途中で何度か披露されたダンスを食い入るよう見つめながら、講演の内容にも熱心に耳を傾けていました。

大前さんは、普段の生活で使っている義足に加え、ダンスや舞台で用いる義足をいくつも自分で作り、様々な

役やテーマに合わせて使い分けているそうです。例えば、ピエロ役には長い義足をつけたり、海賊役には機械のような義足をつける等です。バリアフリーが進み、多様性を認めるアメリカでは、電飾を施した義足が非常に面白がられたそうです。そして、このような話の中で大前さんは、義足であることや、脚がないことは「おいしい」と何度も繰り返していました。義足の人は少なく、また、義足を使ったダンスも誰にもできないからこそ希少価値があると考え、様々な役やダンスに取り組んでいるといます。本当に魅力的な人は、他の人と異なる自分の不自由や欠点をキャラにできる、そのためには広い視野が必要だけれど、その魅力を最大限に活かしてほしいとメッセージを伝えていました。そして、変化することは進化することだと話していました。

講演後には、大前さんへのお礼として、代表生徒による中山中学校の伝統である立志太鼓の演奏がありました。力強い演奏に、大前さんもリズムを取りながら聞いていらっしやいました。大前さんのダンスと、生徒達の太鼓の演奏、そして多数の地域の方々の参加もあり、エネルギーにあふれる実践となりました。

## 6 授業の様子



【 講演① 】



【 講演② 】



【 講演③ 】



【 立志太鼓の演奏 】



【 お礼の言葉 】



【 記念撮影 】